



TITLE:

# ポーコック以後のジェームス・ハリントン研究(1) ー統治組織論と宗教性ー

AUTHOR(S):

竹澤, 祐丈

---

CITATION:

竹澤, 祐丈. ポーコック以後のジェームス・ハリントン研究(1) ー統治組織論と宗教性ー. 経済論叢 2002, 169(3): 27-38

ISSUE DATE:

2002-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/45464>

RIGHT:

# 經濟論叢

第 169 卷 第 3 号

---

金融政策の波及メカニズム……………	古 川 顯 俊 1
ボーコック以後の ジェームス・ハリントン研究（1）……………	竹 澤 祐 丈 27
中国におけるディーラーシステムの出現……………	劉 芳 39
不確実性下の意思決定問題に おける類似関係の役割……………	堀江(中川) 真由美 62
電気洗濯機の普及初期における マーケティング競争の展開……………	大 内 秀 二 郎 74

---

平成14年 3 月

京 都 大 学 經 済 學 會

## ポーコック以後のジェームス・ハリントン研究\*（1）

——統治組織論と宗教性——

竹 澤 祐 丈

### I はじめに

#### II ポーコック解釈の批判者たち：ユートピア主義者、近世共和主義者

（以上、本号）

#### III ポーコック解釈の継承者たち：混合政体論者、イングランド共和主義者

#### IV おわりに

### I はじめに

本稿の目的は、まず、J. G. A. ポーコックによる画期的なハリントン解釈以後に提出された批判的、継承的諸見解の分析をとおして、ハリントンの思想分析のためにポーコックが用いた〈世俗的に表明された宗教性〉という概念装置によって残された課題を、次に、ハリントン研究のさらなる進捗のためには、同時代共和主義者との比較を伴いながらハリントンの宗教性そのものを分析することが必要であることを示し、そして最後に、その統治組織論との特異な連関から、その思想の全体像に迫ることが不可欠であるということを明らかにしたい。

議論は次の様に進められる。まず、同時代におけるハリントンの政治組織論

\* 本稿執筆過程で、Jonathan H. Scott, John Dunn, 田中秀夫、山田園子、安武真隆、の各氏から有益なコメントを頂いた。ここに記して感謝したい。

なお本稿は、2001年1月に「ジェームス・ハリントン研究序説」として原稿を提出したが、紀要特有の問題により、一年後に形式上の改訂作業を伴いながら異なる表題の下で発表される。当初本稿とともに「研究序説」を形成していた前半部分は、「ジェームス・ハリントン研究とJ. G. A. ポーコック」として公刊された（第168巻第3号、第169巻第1号）。従って、本稿において〈別稿〉と表現するのは、この前半部分を指している。併せて参照いただければ幸いである。

の意味に関するポーコックの解釈の不十分さに対する批判的研究を分析しながら、それが〈世俗的に表明された宗教性〉の持つ問題点を間接的に示したことを明らかにする。次に、継承者たちの議論は、基本的には、〈世俗的に表明された宗教性〉の枠組みの中にあり、批判者が指摘するポーコックの議論自体が持つ問題点に十分答えていないことを示す。

## II 批判者たち

別稿で見たように、ポーコックによるマキャヴェッリアン・モーメントの衝撃は、数々の批判を誘発し、ポーコック自身がその「論争の交通整理を促されるほど」<sup>1)</sup>であった。本稿の課題であるハリントンの統治組織論と宗教性の特異な結合に関して、批判者たちは、ポーコック批判に終始するのではなく、異なるハリントン解釈を提示している。ところが、重要な論点を潜在的に提起して

- 1) 田中秀夫、『共和主義と啓蒙——思想史の視野から——』、ミネルヴァ書房、1998年、78ページ。  
なお、これに対する対照的な書評も参照せよ。小田川大典、「書評：田中秀夫『共和主義と啓蒙——思想史の視野から——』」、『イギリス哲学研究』、23号、2000年、95-96ページ；天羽康夫、「書評：田中秀夫『共和主義と啓蒙——思想史の視野から——』」、『経済学史学会年報』、37号、2000年、143-144ページ。

筆者は、田中とは研究対象を異にするが、(小田川も指摘するように)同書の啓蒙的な意義を認める。しかし、ポーコックの思想史研究や「マキャヴェッリアン・モーメント」という枠組みを対象化した上で評価をする際には、ポーコックに批判的な研究者との論争を分析・参照することが、たとえその目的が18世紀研究上の論点の解明であったとしても、不可欠であると考え( Cf. 拙稿、「ジェームス・ハリントン研究とスコットランド啓蒙——研究史サーヴェイの見地からのひとつの問題提言——」、『日本イギリス哲学会関西支部会』、京都、2000年12月、同、「シヴィック・ヒューマニズム——その理念と言語慣習化形態——」、『方法論研究会』、京都、2001年12月、同、「シヴィック・ヒューマニズムと経済学の成立」、『調査と研究』(京都大学経済学会)、近刊予定。)。したがって、ポーコックの研究を対象化するという意味において、それに批判的な研究動向の調査・分析が不十分という点では、天羽と見解を共有する。しかし、(字数制約に起因すると思われるが)天羽が当該の書評で表現したような、研究史サーヴェイ一般の有効性を否定しているかのような言明、そしてそれが原典研究とあたかも二項対立的な作業のように描くことには賛同できない。問題は、原典研究と研究史サーヴェイとの相補的かつ相互的な連関をいかに確立し、思想論ではない思想史研究をいかにして進めるのかという点にあるように思われる。

また、ポーコック自身のマキャヴェッリアン・モーメントを巡る論争に関する応答は、『*The Machiavellian Moment revisited*』を参照せよ。ただし、本節で扱うデーヴィスやスコットの批判には十分に答えているようには思われない。同様の不満は、デーヴィス自身によっても表明されている(J. C. Davis, 'Review Article: A Short Course of Discourse: Studies in Early Modern Conscience, Duty and the "English Protestant Interest"', *Journal of Ecclesiastical History*, 46 (1995), 302-309)。

いるにも拘らず、ポーコックとその批判者（特に、デーヴィス、スコット）の論点は噛み合っているとは言えない<sup>2)</sup>。そこで、デーヴィス、スコット、ポール・レイ (Paul A. Rahe)、アラン・クロマティー (Alan Cromartie) のポーコック批判を考察することを通して、かれらの批判が、時間認識に代表される宗教性という把握、つまり〈世俗的に表明された宗教性〉というポーコックの概念化に向けられていることが明らかにされる。

ポーコックのハリントン解釈に対して、17世紀イングランド史の観点からの最初の実質的批判は、デーヴィスによって行われる<sup>3)</sup>。彼は、その業績が歴史研究に多大な貢献をもたらしたことを認めつつも、まず、「ポーコックのシェーマの有効性」、次に、そのシェーマがハリントンの思想の重要な要素を隠蔽したこと、そして最後に、結果として、ポーコックがハリントンの全体像を不適切に解釈したこと、を指摘する<sup>4)</sup>。つまり、デーヴィスによれば、ハリントンの思想において古典的共和主義の本質的部分が占める割合は、ポーコックの説明とは逆にほとんどないに等しく、その代わりに、「ユートピア主義」<sup>5)</sup>

2) スコットのハリントン解釈に対するポーコックの不満は、以下を参照せよ、J. G. A. Pocock, 'A discourse of sovereignty: observations on the work in progress', in Nicholas Phillipson & Quentin Skinner eds., *Political discourse in early modern Britain* (Cambridge, 1993), pp. 377-428, esp., pp. 402-407)。

3) デーヴィスは、ハリントンの生きた17世紀イングランドを理解するためにはその宗教的文脈の分析が不可欠であると強調する (J. C. Davis, 'Radicalism in a traditional society: the evaluation of radical thought in the English commonwealth 1649-1660', *History of Political Thought*, 3 (1982), 193-213; *idem.*, 'Cromwell's religion', in John Morrill ed., *Oliver Cromwell and the English Revolution* (London, 1990), pp. 181-208; *idem.*, 'Religion and the struggle for freedom in the English Revolution', *Historical Journal*, 35 (1992), 507-530; *idem.*, 'Against Formality: One aspect of the English Revolution', *Transactions of the Royal Historical Society* (6th series), 3 (1993), 265-288)。

4) J. C. Davis, 'Pocock's Harrington: Grace, Nature and Art in the classical republicanism of James Harrington', *Historical Journal*, 24 (1981), 683-684。

5) したがって、デーヴィスが共和主義一般とユートピア主義とを対置したわけではない。デーヴィス（そしてのちにスコット）が対置したものは、古典的共和主義とユートピア主義であって、その根拠をハリントンによる統治組織論の重視に見出している。この点に関して、福田有広、『歴史の中の「ユートピア」——マシュー・レンのハリントン批判について——』、佐々木毅編、『自由と自由主義——その政治思想的諸相——』、東京大学出版会、1995年、97ページ、での記述は適当とは思われない。

またデーヴィス自身も、最近の論考では、ハリントンを、「ユートピア主義者」ではなく、ノ

を認めることができるのである。

具体的なデーヴィスによるポーコック批判は次の様である。まず、ポーコックの「シェーマ」が持つ全般的な問題点を、デーヴィスは、「循環論の危険性」と要約する<sup>6)</sup>。それは、「ある伝統の道筋を[まず]定義して、その方向に沿ったものすべてを受入れ、それに相応しくないものを捨て去る」議論の仕方である<sup>7)</sup>。そしてデーヴィスの批判は、この「循環論」が惹起した解釈上の具体的弊害に向けられる<sup>8)</sup>。それは、ポーコックのハリントン解釈、特にその統治組織論の意味に関する解釈が、恩恵・終末論と世俗性とのいずれを強調するかという点で揺れ動いていることに見出すことができる。つまり、「『オシアナ』は、恩恵によって設立された神政政治、……自然的設立物、……千年王国、そしてユートピアとして様々に描かれる。……しかもこのばらつきを整理することがほとんど試みられてない。』<sup>9)</sup>

しかし、デーヴィスのこの批判は、世俗性と宗教性との二項対立を前提に「ばらつき」を整理せよという主張なのではない。むしろ、両者が必ずしも対立しない思考法——「神は統治を望んだが、特定の統治形態を定めたわけではない」という伝統的な思考法——が、17世紀イングランドで広範に認められることを踏まえて、ハリントンの解釈をおこなうべきだという主張なのである<sup>10)</sup>。特に、同時代共和主義者と対照的な点でもあるが、ハリントンが特定の統治形態に執着した理由を詳細に分析する必要があるのである。

以上のポーコック批判を踏まえて、デーヴィスは、ハリントンに関しての代替的解釈を提示する。それは、ハリントンが、古典的共和主義やマキャベッリ

ススコットの解釈に従って「近世共和主義者」と形容する（例えば、J. C. Davis, 'Equality in an unequal commonwealth: James Harrington's republicanism and the meaning of equality', in Ian Gentle, John Morrill, & Blair Worden eds., *Soldiers, Writers, and Statesmen of the English Revolution* (Cambridge, 1998), pp. 229-242)。

6) Davis, 'Pocock's Harrington', p. 686.

7) *ibid.*

8) *ibid.*, p. 687.

9) *ibid.*, p. 688.

10) *ibid.*

の思想のいずれの伝達者でもなく、単なる「ユートピア」主義者であるというものである。デーヴィスは、「手におえない人間本性を受入れ、罪深い人間を想定する社会」を指向するものとして、「ユートピア」主義者を定義する<sup>11)</sup>。したがって、この「ユートピア」を維持するためには、その社会が、「制御することも変更することもできない既定の道徳の型を可能な限り実演することを余儀なくされている臣民たち」から構成されることが前提となる。つまりハリントンは、政治と宗教の二つの領域における人間の善を指向する諸能力(=アリストテレスの人間観)に関して悲観的であったので<sup>12)</sup>、「神の摂理ではなく世俗的な国制案の操作によって、……平等なコモンウェルスが維持されるのであった。世俗化された……古典的共和国において、ハリントンはそれをまたユートピア化し、それによって共和国を崩壊しないもの、つまり不死の存在とした。」<sup>13)</sup>

ここで注目に値することは、デーヴィスとボークックの擦れ違いである。両者ともに、世俗性と宗教性の(二項対立的でない)特異な連関が17世紀イングランドで認められた事実を踏まえながらも、異なるハリントン解釈を引き出している。この齟齬は、明快ではないものの、統治組織を時間認識の発現形態として理解すること、つまり〈世俗的に表明された宗教性〉というボークックの概念化に対するデーヴィスの違和感に起因する。つまりハリントンは統治組織論に執着した理由を、デーヴィスはその「ユートピア」的思考に求め、他方でボークックはそれを千年王国主義に基づく時間認識の発現形態と把握する。

「ユートピア主義者」というデーヴィスの解釈結果ではなく、その分析視角は、その齟齬と共に、同時代共和主義者における例外的人物としてハリントンを解

11) J. C. Davis, *Utopia and the Ideal Society: a study of English utopian writing 1516-1700* (Cambridge, 1981), p. 207. これに対して、「ユートピア」という語に余りに特殊な定義を与えているという批判がある。例えば、W. Lamont, 'Review article', *English Historical Review*, 97 (1982), 361-371; P. Eirich, 'Review article', *Renaissance Quarterly*, 35 (1982), 642-644. を参照せよ。

12) Davis, *Utopia*, p. 238.

13) *ibid.*, p. 239.

釈するスコットによって洗練されることになる。

スコットは、デーヴィスの問題提起を受け、ポーコックのハリントン解釈を批判する<sup>14)</sup>。その批判の要点は、ポーコックが描いた諸思想の流れの代表具現者としてハリントンは不適切であり、むしろ、それらの思想の含意にほとんど当てはまらない「例外的存在」であるということであった<sup>15)</sup>。つまり、ポーコックのようにいくつかの思想受容の屈折や断絶を間に挟まなくても、より明瞭で直接的な思想的伝達者はハリントン以外にいないのではないかという批判である。

スコットは、まず、「古典的共和主義という流行の形態を用いながらも、ハリントンは、その哲学的・政治的な実質部分を遺棄した」と指摘する<sup>16)</sup>。つまり、ハリントンは、古典古代の知的遺産に多くを負いながらも、それらに変更を加えた人物、換言すれば、古典的共和主義者ではなくマキャベッリに始まる近世共和主義者である<sup>17)</sup>。したがって、スコットによれば、ポーコックが描く古典的共和主義の伝達者としてのハリントンという像は、共和主義自体の歴史の変遷——古典的共和主義から近世共和主義へ——にポーコックが十分な注意を払っていないことに起因する。

しかも、スコットによれば、ポーコックの不適切なハリントン解釈は、同時

14) そのポーコック批判は、ハリントンの同時代人の共和主義者アルジャーノン・シドニー (Algernon Sidney, 1622-1683) に関するスコット自身の初期著作にも見ることが出来る (Jonathan Scott, *Algernon Sidney and the English Republic, 1623-1677* (Cambridge, 1988), esp., pp. 13-42.)。

15) Jonathan Scott, *England's troubles: Seventeenth-century English political instability in European context* (Cambridge, 2000), p. 292. また本書によって、スコットのポーコック批判が、共和主義解釈に限定されるのではなく、広く17世紀ヨーロッパ史およびイングランド史に関する異なる解釈に支えられていることが明らかになった。なお、同書に対する以下の書評も併せて参照せよ、Paul Seawood, 'Review', *Parliamentary History*, 20 (2001), 244-246; John Miller, 'Review', *History*, 283 (2001), 398-399; R. A. Houlbrooke, 'Book Review', *English Historical Review*, 468 (2001), 909-910; John Marshall, 'Review', *Albion*, 35 (2001), 123-126.

16) Jonathan H. Scott, 'The Peace of Silence: Thucydides and the English Civil War', in M. Fairbairn & B. Oliver eds., *The Certainty of Doubt: tribute to Peter Munz* (Wellington, 1996), p. 105.

17) Cf. Jonathan Scott, 'The rapture of motion: James Harrington's republicanism', in Phillipson ed., *Political discourse*, p. 141.



代共和主義者たちとの相違を重視しないことに関連する。ハリントンと同時代共和主義者との明白な違いは、「自然法の言説への[ハリントンの]関心の相対的欠如、(ポリビュオスに起源を持つ)混合政体の理念に関する彼[＝ハリントン]の仮定、そしてその極度の制度主義 constitutionalism」であった<sup>18)</sup>。またハリントンを除く同時代共和主義者は、統治・教会組織論よりも正しき精神的原理を強調する傾向を持った「反形式主義 anti-formalism」を共有していたとスコットは断定するのである<sup>19)</sup>。

そしてスコットによれば、以上のハリントンの「例外的」側面は、彼の物質主義的側面によって支えられている。つまりこのハリントンの物質主義と古典的共和主義的外見との併存は、スコットによれば、「ホッブズ主義的道德哲学の産物」なのである<sup>20)</sup>。結果として、ハリントンは、「古典的共和主義の伝統である道徳的基礎と参画的基礎とを犠牲」にしたとスコットは解釈する<sup>21)</sup>。したがって、スコットによれば、ハリントンの思想を十全に分析するためには、ホッブズとの理論的相関性の分析を含む同時代共和主義者との比較分析が不可欠なのである<sup>22)</sup>。

しかしながら、ハリントンとホッブズとの比較分析の必要性をスコットに倣って認めるとしても、そのことがスコットのハリントン解釈の受入を直ちに意味するのではない。つまりスコットが解釈するように、ハリントンの制度主義的・物質主義的側面の存在を古典的共和主義からの逸脱として、また、ホッブズとの思想的相関性からホッブズ主義者にして近世共和主義者であることを結論づけるとしても、制度主義的側面のハリントン自身による意味付けに関す

18) Jonathan H. Scott, 'Classical Republicanism in Seventeenth-Century England and the Netherlands', in Quentin Skinner & Martin van Gelderen eds., *Republicanism: A Shared European Heritage*, Vol. 1 (forthcoming), p. 5. 草稿の閲覧を許して頂いたスコット氏に感謝したい。

19) Scott, *England's troubles*, p. 295; *idem.*, *Algernon Sidney and the English Republic*, p. 108; Davis, 'Against Formality'. この点に関して、ボークック、ウォーデンのいずれの議論も説得的ではないとスコットは批判する (Scott, *England's troubles*, pp. 295-296)。

20) Scott, 'Classical Republicanism', p. 20.

21) Scott, 'The rapture of motion', p. 162.

22) その簡略な分析結果は、Scott, *England's troubles*, ch. 14 に示されている。

るさらに詳細な分析や、その制度主義的立論を同時代共和主義者がどのように評価していたのかに関する探求が不可欠な作業として要請されるのである。そのためにも、〈世俗的に表明された宗教性〉というポーコックの概念化に関するより詳細な分析が不可欠なのである。

レイもまた、スコットと同様に、共和主義自体の歴史の変遷、つまりマキャヴェッリ以降の近世共和主義者としてハリントンを描き、その思想における制度主義的側面を重要視する。レイによれば、「ニッコロ・マキャヴェッリの基礎のうえにホッブズによって確立された制度主義的政治学 institutional political science」は、「ジェームス・ハリントンによって様々な方法によって発展させられた」<sup>23)</sup>。換言すれば、「ハリントンの議論における古典的諸要素は、数も多く目立つのであるが、実際は、それらはその理論体系においては末梢的」<sup>24)</sup>であって、この「古典的諸要素」は、「道徳的基礎付けよりもむしろ物質的なそれに基づき新しい類型学 typology」——もちろんそれは古典的共和主義の諸前提とは程遠い——を覆い隠す目的を持ったものである<sup>25)</sup>。つまり、レイによれば、「ロゴスのための人間の能力が、直接的で物質的な利点の計算から真に公正で善なるものへ人間の関心を高めることを可能とするというアリストテレスの確信を、実際には不可能であると退けながら」、「ハリントンは、人間の欲望は飽くことを知らず、だから理性は情念の奴隷なのであるという信念をマキャヴェッリやホッブズと共有していたのであった。」<sup>26)</sup>したがって、「ハリントンは確かに、マキャヴェッリによって先駆付けられる政治の制度的分析とホッブズの新しい政治学とを、実行可能な「古典的ではなく」近世共和

23) Paul A. Rahe, *Republics ancient and modern: classical republicanism and the American Revolution* (Chapel Hill, 1992), p. 19. また *idem.*, 'Antiquity Surpassed: The Repudiation of Classical Republicanism', in Wootton ed., *Republicanism, Liberty, and Commercial Society*, pp. 233-269, esp., pp. 256-260; *idem.*, 'Situating Machiavelli', in James Hankins ed., *Renaissance Civic Humanism: Reappraisals and Reflections* (Cambridge, 2000), pp. 270-308 も参照せよ。

24) Rahe, *Republics*, p. 410.

25) *ibid.*, p. 411.

26) *ibid.*

主義的秩序の確立という課題に当てはめた最初の人物なのであった。<sup>27)</sup>

ところが、スコットも指摘するように、レイもまたボーコック同様に、ハリントンを17世紀イングランドの共和主義の代表者と見なすので、ハリントンを近世共和主義者であることを以ってその時代における古典的共和主義の不在を導出する<sup>28)</sup>。ここでもまた同時代共和主義者とハリントンとの比較分析はなされていない。しかも、レイは、ハリントンの宗教性に関する分析——これはレイ自身の物質主義的ハリントンという解釈の妥当性を脅かす可能性がある——を全く試みずに、ハリントンの同時代の風潮を、「物質的利害に基礎を置く政治制度の再構築を美徳とする」傾向を持った時代であると概括するだけである<sup>29)</sup>。ハリントンがアリストテレスの道徳的基礎付けを継承しなかったという自分自身の主張を効果的に裏付けるためには、ハリントンの統治組織論と宗教性との特異な関係に関する体系的な分析が欠かせないのではなかろうか。

本節において最後に考察するのは、クロマティーの議論である。彼は、ボーコックの方法論上の難点を明らかにするために、ハリントンの再解釈を試みる。導き出されるハリントン像は異なるものの、その批判の仕方はデーヴィスと同じく循環論批判である。つまり、「徳と運命の闘争としての政治史を描く伝統の一部としてのジェームス・ハリントンの自己同一性 identity は、ボーコックの詳細な探求の成果によって見出されたというよりも、むしろその前提なのである。」<sup>30)</sup>

ここからクロマティーはさらに踏み込んで解釈を試みる。曰く、ハリントンと「マキャヴェッリとの相違が新型軍 the New Model Army とその文民の支持者からなる神聖な寡頭政 a godly oligarchy という急進的な理想を拒否することと特段緊密な関係を持っていた」<sup>31)</sup>。そこでクロマティーはハリントンの

27) *ibid.*, p. 425.

28) Scott, *England's troubles*, p. 292.

29) *op. cit.*, p. 400.

30) Alan Cromartie, 'Harringtonian virtue: Harrington, Machiavelli, and the method of the moment', *Historical Journal*, 41 (1998), p. 999.

31) *ibid.*, p. 991.

著作における、「ストア的自然法」<sup>32)</sup>と、「観想の沈黙物としての徳という像」<sup>33)</sup>に注目し、それらが、「イングランドの急進主義者たちの目的とハリントンとの相違」<sup>34)</sup>、つまり、「学卒聖職者 graduate clergy」と「ジェントリ」の徳によって確保される世俗・宗教事項に関するリーダーシップの確立と意図している証左であると解釈する<sup>35)</sup>。これが、クロマティーによれば、ハリントンがマキャヴェッリの徳の概念から離脱した理由であった。

加えて、クロマティーによれば、このハリントンの徳に関する（マキャヴェッリとは）対照的な含意は、「統治組織と人格との連関」というアリストテレス的な考え方からの離脱の縮図でもある<sup>36)</sup>。「ハリントンにとって、市民の資質は二次的な重要性を持つだけである。だから徳というものも、共通善を促進する単なる行動にすぎなくなるのである。」<sup>37)</sup>したがって、ハリントンの著作の読者が（ポーコックが示したように）、「ハリントンの人間の自律性がなんらかのアリストテレス的な観点を含むと見なすためには、極めて異なる典拠から自らの解釈を取り出さなければならなかったはずである。」<sup>38)</sup>

クロマティーのポーコック批判の主眼は、ハリントンの思想自体を理解するためではなく、ポーコックの議論の脆弱性を示すことにあった<sup>39)</sup>。そのために、主たる分析対象は、ポーコックとハリントンの著作に限定される。クロマティーは、ハリントンの宗教上の取り決めや、制度構築と人間の自律性の関係、に注意を向けつつも、その統治制度論と宗教性の特異な関係に関する体系的な分析を踏まえていない点、そしてハリントンと同時代共和主義者との関係を全

32) *ibid.*, p. 994.

33) *ibid.*, p. 996.

34) *ibid.*, p. 997.

35) *ibid.*, p. 998.

36) *ibid.*, p. 1006.

37) *ibid.*

38) *ibid.*, p. 1007. しかしポーコックに言わせれば、特異な世俗性を持つイングランドという歴史的文脈こそが、ハリントンとアリストテレスとの（「離脱」ではなく）共通性を支えているということになろう。詳細は別稿を参照せよ。

39) *ibid.*, p. 1008.

く視野に入れていない点において、ハリントン研究としては不満が残る。また、そのボーコック批判も、ボーコックが時間認識に注目しながら解釈したハリントンの全体像を問題にしない点において、未消化の議論といえる。

本節で扱ったボーコックのハリントン解釈に対する批判的見解は、ボーコックがマキャヴェッリアン・モーメントを〈継承〉と〈断絶〉との両側面から説明していたこと、つまり、古典古代の理念が、その単純な復活ではなく、17世紀イングランドの既存の思考様式と様々に共鳴しながらその発現形態を形成していったという主張を十分に踏まえているようには見えない。つまり別稿で見たように、ボーコックは、ハリントンを、イングランドの既存の思考法と古典古代の理念との統合を試みた人物<sup>40)</sup>として描いたのであって、マキャヴェッリとの思想的〈断絶〉やホッブズからの影響を部分的に認めることが、ハリントンの思想全体を、古典的共和主義からの逸脱、制度主義、そしてホッブズ主義と断定することを担保するわけではない。

また、スコットやレイのように、共和主義の時代区分を過度に強調することは、ハリントンの同時代共和主義者たちの理論的共通性の解明と一対でおこなうべきであって、どちらか一方のみでは生産的論争を生み出しにくいとも言える<sup>41)</sup>。この点において、批判者たちの議論をそのまま肯定することは出来ない。

しかし、彼らの議論が、明示的ではないものの共通して疑問視しているのは、〈世俗的に表明された宗教性〉というボーコックの概念化の妥当性であった。この違和感は、具体的には、ハリントンが統治組織論を議論の中心に据えた理由——ボーコックによれば、時間認識に具現化される宗教性の表明であり、批判者たちによれば、人間性を重視しない制度万能主義的側面の表象——に関する見解の相違であった。この問題を考える上で、デーヴィスやスコットが指摘するように、ハリントンの思想と同時代の共和主義者との比較作業が不可欠

40) Cf. Pocock, *Machiavellian Moment*.

41) Blair Worden, 'Marchmont Nedham and English Republicanism', in David Wootton ed., *Republicanism, Liberty, and Commercial Society, 1649-1776* (Stanford, 1994), p. 48. ただしウォーデンがスコットとレイに言及してこの批判をおこなっているわけではない。

となってくるのである。

ボーコックのハリントン解釈に関する以上のような批判が、その継承者たちによってどのように扱われているのか、これが次節で扱う課題となる。

(つづく)